

七五三の3か月後に亡くなった娘 不誠実な医療側の対応で二重の苦しみ 「一緒に死にたい」とさえ思った

医療過誤原告の会が30周年記念シンポジウム

医療過誤による被害者とその家族の集まりである「医療過誤原告の会」の設立30周年記念シンポジウムが、2021年12月19日、東京都内の会場とオンライン併用で開かれた。医療過誤原告の会は1991年に設立された。医療過誤被害者や家族による全国最大規模の団体という。被害者への支援活動をはじめ、医療事故調査制度の改善に向けた活動などに取り組んでいる。

奪われた「命を見つめて」～被害者を家族が語る～

30周年記念シンポジウムのテーマは、「奪われた『命を見つめて』～被害者を家族が語る～」。妻や夫、子どもや親が医療過誤の被害者となった10人の家族が1人ずつマイクの前に立ち、被害者が歩んできた人生や、元気だった頃の思い出、医療過誤に対する思いなどについて語った。1人約15分ずつ、写真をスライドで映し出しながら、被害者の人となりについて語る。事故で突然、命を失った方、長い寝たきりの生活を経て亡くなられた方、命は取り留めたものの重い後遺症を抱えて闘病中の方もいる。裁判が終了して年月がたった人もいれば、現在、係争中の人もいる。事故の概要はスライド1枚にまとめられて参加者に配布され、詳細について改めて説明はされない。今回のシンポジウムの目的は、どんな事故だったかを語ることにあるのではなく、被害に遭った一人ひとりにそれぞれの人生があり、家族にとっていかに大切な存在であったかを、家族自身の口から語ってもらうことにあるためだ。

「まだまだ話がしたかった」「気持ちの整理は死ぬまでできない」



医療過誤で命を落とした娘さんを語る宮脇正和さん（12月19日、東京都内で）

一人ひとりの家族の話から、印象に残った言葉などを記したい。

「ヒマワリが好きで、明るく、力強く、面倒見のいい、おせっかい屋の妻。教え子の悩みの相談にもよくのり、慕われていました」 「共働きで忙しい合間を縫って、二人で温泉旅行に行くのが楽しみでした。道中の車でよく話をしました。まだまだ、たくさん話がしたかった」

「地元出身で地域のイベントにもよく参加し、いろいろな人から声をかけられていた夫。葬儀には250人ほどが参列していただき、それだけ慕われていた夫の大きさを改めて感じました」

「野球が上手であちこちの大会に出かけ、写真もユニホーム姿が多いです。野球をしていた時の首筋は精悍（せいかん）で、きれいに揃った真っ白な歯が印象的で、夫の笑顔が私は大好きでした」 「数え3歳の七五三の写真の3か月後に亡くなった娘。納得のできない亡くなり方と病院側の誠実でない対応に二重の苦しみだったし、家族も『一緒に死にたい』と何度言ったことか。それくらいの打撃でした」

「家族だんらんの写真の2か月後に亡くなった息子。他の病院に連れていっていたらとか自責の念は消えないし、息子が死んで21年目になるけれど、気持ちの整理は死ぬまでできない」

「幼い頃から母を気遣ってくれる優しい娘で、折々にくれた手紙は100通あまり。初めて家に彼氏を連れてきたときには、料理も不慣れな手つきだったのが、頑張って練習して晩御飯もつくってくれるように。2週間で退院して大学生活に戻るはずだったのに」 元気だった頃の写真を映し出しながら、涙ながらに思い出を語る家族の姿もあった。

医療の管理者は真摯に向き合ってほしい

会長の宮脇正和さんによると、今回の記念シンポジウムで、従来取り上げてきたような制度的な問題ではなく、家族の語りを企画したのにはわけがあるという。その意味について、宮脇さんは主催者あいさつで次のように説明した。 「2015年に発足した医療事故調査制度を、大きな期待を持って見守っているが、医療の管理者の方々が医療事故に真摯（しんし）に向き合うというふうには、残念ながらまだなっていない。 いったん医療事故が起こると、それまで一緒に病気に立ち向かっていたはずなのに、いつの間にか敵対関係のような感情も生まれてしまう」

「私たち被害者は決して怖い存在ではなく、事故を受け止め、次の被害を生まないための対策に役立てていただくことで、犠牲になった家族の命が少しでも生かされることを強く願っている」

「被害者はそれまで普通に生活し、病から回復したいと思って医療機関を受診し、大きな信頼を持って医療機関に命を託した。そういう思いを、まずきちんと少しでも、多くの医療管理者は受け止めていただきたい」 「医療の管理者が医療事故の被害者の思いを受け止めていただき、再発防止に向けて一緒に力を合わせるような、そういう土壌を作っていく、きっかけになればと願っている」

被害者一人ひとりに、それまで歩んできた人生や家族がある。家族が語った思いが、医療側が事故に真剣に向き合う姿勢へとつながることを、強く願う。（田村良彦 読売新聞専門委員）